

ある僧の奇蹟

田山花袋

青空文庫

一

久しく無住^{むぢゆう}であつたH村の長昌院には、今度新しい住職が出来た。それは何でも二代前の老僧の一番末の弟子で、幼い時は此の寺で育つた人だといふことであつた。「ほ、あのお小僧さんが？ それはめづらしいな。」などと村の人達は噂^{うはさ}した。

先代の住職が女狂ひをして、成規^{せいぎ}を踏まずに寺の杉林を伐^きつて売つたりして、そのため寺にもゐられなくなつてから、もう少くとも十三年の歲月は経過した。始めは一里ほど隔つた法類のT寺がそれを監督したが、その和尚^{をしやう}も二三年して死んで了^{しま}つたので、あとは村の世話人が留守居などを置いて間に合せて来た。寺は唯荒るゝに任せた。

長昌院と言へば、この界限^{かいがい}でもきこえた古い寺である。徳川時代にもいくらか御朱印のついてゐる格式の好い方であつたし、田地も十分についてゐたし、境内も広い広いものであつたし、先々代の老僧などは、駕籠^{かご}に乗つて伴廻りを三人も四人も伴^{たづ}なければ決して戸外^{おもて}には出ないほどであつた。それに古い由緒^{ゆゑしよ}が更にこの寺を価値^{ねうち}づけた。寺の奥にある大きな五輪塔形の墓、苔^{こけ}の深く蒸^むした墓、それは歴史上にも聞えたこの土地の昔の城

主にがしの遺骸を埋めたところで、戦国時代にあつては、この城主は、この近隣数郡の地を攻略して、後にはその勢威がをさく一國を震^{しん}懼^{せふ}させたといふことであつた。今でもその住んでゐた城の址はその村の西の一隅に草^{くさ}藪^{やぶ}になつて残つてゐるが、半ば開墾されて麦畠、豆畑、桑^{くは}畑^{はたけ}になつてゐるが、それでも館^{やかた}の址^{あと}だけは開墾すると崇^{たう}があると言つて、誰も鋤^{すき}も入れずにそのまゝにして置いた。取巻いた壕^{ほり}の跡には、深く篠^{しの}笹^{ささ}が繁つて、時には雨後の水が黒く光つて湛^たへられてゐるのが覗^{のぞ}かれた。春はそこから出て野に行く道に、蓮^{れん}華^げ草^{さう}や堇^{すみれ}の一面に咲いたところがあつて、村の小娘達はそれを採つては束にして終日長く遊んでゐるのを誰も見懸けた。

梅^{つゆ}雨^ゆの降^{ふり}頻^{しき}る頃には、打渡した水の満ちた田に、菅^{すげ}笠^{がさ}がいくつとなく並んで、せつせと苗^{なへ}を植^なゑて行つてゐる百姓達の姿も見えた。かれ等は用水の漲^{みなぎ}つて流れる縁を通つて、この昔の館^{やかた}の址^{あと}の草藪に埋められてある傍^{かた}を掠^{かす}めて、そしていつも揃つて野良の方へと出掛けて行つた。

少くとも、この日村では、半ば野に、半ば丘に凭^よつてゐるこの日村では、その城主の館の址と、五百年も前からあつたといふ寺と、その寺に残つてゐる苔^{こけ}蒸^むした墓と、この三つが、長い「時」の力の中に僅^{わづ}かに滅びずに残つてゐるもので、それ以外には何物も昔の跡

を語るものはなかつた。寺の大檀越^{だいたんをち}で、旧家で、昔は寺の爲めに非常に喜捨をしたといふSTといふ家でも、その分家の分家が僅かに小さく残つてゐるばかりで、古い苔蒸した無数の墓の外^{ほか}にはその昔の何事をも語らなかつた。唯、雲雀^{ひばり}が高く囀^{さへづ}つて空に上つた。

今から数年前であつた。ある夏の日の晴れた午後の日影を受けて、此処等にはつひぞ見たことのない新しいパナマ帽を冠つた、縞^ろの紋付の羽織にちやんと袴^{はかま}を着けたハイカラの若い綺麗な紳士が、銀の環^わの光つたステッキをつきながら、村長につれられて夥^{おびたゞ}しく荒廢したその無住の寺の山門へと入つて來た。

こんな会話を二人はした。

「えらく荒れてますな！」

「どうも……好い住職がないもんですから……それに、もとの住職が寺の借金を沢山^{たくさん}残して行つたもんですから……」

「もう、長くゐないのですか、住職は？」

「八九年になります。」

村長は丁寧な言葉で深く尊敬するやうにして話した。

紳士は庇^{ひさし}の落ち、軒の傾き、壁の崩れてゐる本堂の中に下駄のまゝ上つて行つたり、留

守居の男の淋しさうに住んでゐる古い庫裡^{くら}の方へ行つて見たりした。奥の苔の蒸した五輪形の墓の前に行つた時には、紳士は長い間跪^{ひざまづ}いて手を合せた。

この紳士は今朝突然この村にやつて来た。そして村長の宅^{うち}を訪^{たづ}ねた。かれは其処から一里に近い田舎町の旅舎^{やじや}に昨夜^{ゆうべ}わざ／＼やつて来て宿を取つてゐたのであるが、その出した名刺を見た村長は、俄^{には}かに言葉^{ことば}を丁寧にして、紳士の綺麗な顔を恐る／＼見た。名刺には田舎の村長を驚かすに足る官名が書いてあつた。

紳士は寺のことを聞き、墓を聞き、またその昔の館^{やかた}の址^{あと}を聞いた。今だに壕^{ほり}の跡が依然として残つてゐるといふことを村長から聞いた時には、紳士の顔にはある深い感動の表情が上つた。やがて紳士はその墓と館の址とを残して永久に立去つた昔の城主の遠孫であることを村長に話した。村長は愈々^{いよく}辞を低うした。

「何も他^{ほか}には残つてはゐませんか。」

「何も……旧家といふのも大抵潰れて了つたものですから……」

「ふむ……」

かう言つたが、「さうすると、その先祖は小田原^{ほろぼ}に亡^{ほろ}びされて、それから、野州に行つて、そこで今の主人を持つたんですな。何でも、野州で今の藩侯の家来になつたのは、こゝに

墓のある人の孫に当つてゐるさうですから……」

「さやうで御座いますか。こゝから、お跡が野州に？」

かう村長は別に感動するやうな風もなしに言つた。

紳士は最初に村の西の隅にある館の址に行つた。濠^{ほり}、草や笹に埋められた壕、それこれには非常になつかしさうに見えた。かれはわざ／＼草藪をわけて、その小高いところまで入つて行つた。しかし其処には何もなかつた。

「城ツて言つても、その時分は、館^{やかた}なのだから——」

こんなことを独^{ひとりごと}言のやうに言つた。で、そこを出て、かれは用水縁^{ようすゐべり}の路にその都人士らしい姿を見せつゝ、寺の方へとやつて来た。途中では、丁^{ちやうど}度ひろい庭で麦を打つてゐる百姓達が連^{からぎを}枷を留めてじろ／＼かれの方を見た。

寺にも一時間ほどゐた。留守居の男が赤く濁つた茶などを勧めた。

かれは又訊^きいた。

「寺に、先代の弟子と言ふものもなかつたのですか？」

「大勢あつたのですけれども……。それも先々代ですが……。先^{せん}住^{ちゆう}にはありませんけれども……。何うも皆な還^{げんぞく}俗したり何かして了ひましてな……。しかし、いづれは住

職を置かないでは困るんですから、そのうち好いのがあつたらと思つてはをりますのです。無住でおきましたから、もう先住の拵^{こしらへ}た借金もあら方ぬけました……」

「兎^とに角^{かく}、由緒^{ゆゑしよ}のある寺をかうして置くのは惜しい。」

「さやうですとも……」

で、その紳士は多くの布施^{ふせ}を置いてそして歸つて行つた。

あとはまた長い月日が経つた。

二

新しく出来た住職は、四十二三位で、延びた五分刈頭、鉄縁^{てつぷち}の強度の眼鏡、単衣^{ひとへ}にぐる／＼巻いたへこ帯、ちよつと見ては何^どうしても僧侶とは思へないやうな風采^{ふうさい}であつた。「あれが慈海さんけえ？　何^どうしてもさうは思へねえだ。丸で変つちやつたな。何処かの別な人としか思へねえな。あの可愛い小僧さんとは何うしても思へねえ。」昔を知つてゐる年を取つた村の婆さん達はかう言つて噂^{うはさ}した。

若い住職に取つても、あたりは余りにひどく變つてゐた。變りすぎてゐた。これが昔の

あの寺かと思つた。あの盛^{さかん}な立派な堂々とした寺かと思つた。最初来た時には、これが先々代の老僧が威権を振つたあの寺とは何うしてもかれには思へなかつた。数年前に紳士がやつて来た時とは、更に更に寺は荒れた。裏の大きな垂木^{たるぎ}は落ち、壁は崩れて本堂の中は透^すいて見え、雨は用捨なく天井から板敷の上へと落ちた。仏具なども、金目のものももう何もなかつた。金の燭^{しよく}台^{だい}、鍍^{めつき}のキラ／＼と日に輝く天蓋、雲竜の見事な彫刻のしてあつた須弥壇^{しゆみだん}、さういふものはもう跡も形もなかつた。本尊^{ほんそん}の如来^{にょらい}仏^{ぶつ}が唯さびしさうに深い塵埃^{ほこり}の中に埋められたやうにして端坐してゐるばかりなのをかれは見た。

庫裡^{くり}から本堂に通ずる長い廊下は、風雨に晒^{さら}されて、昔かれが老僧に叱^{なぐさ}られながら雑^{ざつ}巾^{きん}がけをしたところとも思へなかつた。中庭の樹木も唯繁りに繁つた。蜘蛛^{くも}の網^すや塵埃^{ほこり}や乞食^{こじき}の頭のやうにボサ／＼と延びた枝や——その中でも、金目な大きな伽羅^{きやら}の丸い樹はいつか持つて行つたと見えて、掘つたあとが大きくそこに残つてゐた。唯、霧島の躑躅^{つじ}が赤くあたりを絵のやうにした。

年老いた世話人が来てかれにかれの先代——かれの兄弟子の話をした。

あのおとなしい静かな兄弟子が、世話人の話すやうな残忍無恥な、又は貪欲^{どんよく}な、又は無残な行為をして、あの老僧の経営した寺をかうした廃寺にしてしま^{しま}はうとはかれは夢にも

思はなかつた。世話人の言ふ所に由ると、この先住の女戒を破つた形は殊に烈しかつた。最初の中は此方から身を躲して、こつそりさういふ土地に出かけて行つたが、後には平気で、幅で、女を庫裡へ伴れて来ては泊らせてやつた。かれは放蕩のための金がなくなると、仏具を売り、植木を売り、経文を売り、後には僧衣や袈裟までも売つた。たうとうそのために問題が大きくなつて、寺にゐられなくなつた。伐採した杉森の跡は、今でもちやんと指點された。

「今は何うしてゐるだらう？」

かう新しい住職はをり／＼兄弟子のことを考へた。「何でも、東京に行つてゐるさうです。最後の女と浅草あたりで道具屋か何かしてゐるさうです。」かう世話人は言つた。しかし、それももう八九年も前のことであつた。今は死んだか生きてるかわからなかつた。兎に角、庫裡——二三年前まで留守居の男のゐた庫裡を掃除して、そこに住居することの出来る準備を世話人達がして呉れた。黒く煤けた天井を洗つたり、破れた壁をざつと紙で貼つて膳つたり、囲炉裏の縁を削つたり、畳を取り替へたりして、世話人達は新しい住職のやつて来るのを待つた。庫裡の前の庭も皆なしてかゝつて綺麗に掃除した。

「長い間、無住にして置いたので、金はいくらかは出来てゐるで、二三年したら、本堂の

修繕も出来ると思ふが、まア、それまでは我慢してゐて下せい。これも先々代の寺だと思つてな。」かう世話人達は新しい住職に話した。

三

「老僧だツて、決して女によかい戒を守つた人ではなかつた。」

かれはかう思はずには居られなかつた。……ふとある光景が浮んで来た。それは新しい住職がまだ此寺に貫はれて来たばかりの時であつた。老僧も六十位であつた。ふと二階へあがつて行く。さつきの女がまだゐる。綺麗な女が……。時々やつて来て三味線なんかを弾く女が……。扉とを明けると、老僧の赤い顔、太い腕、女の変に笑つた顔！

と、今度はそれとは違つたあるシインが浮び出して来た。かれはもう十五六であつた。かれは庫裡の玄関のぢき傍の三畳——さつきそこをかれは明けて見た。一杯蜘蛛くもの網す、山のやうに積つた塵埃ごみ、ぷんと鼻を撲うつて来る「時」の臭かうしひ、なつかしく思つて明けては見たが、かれはすぐその扉を閉めて了つた。その三畳の格子かうしの前のところで、軽い艶なまめかしい駒下駄の音が来て留つた。かれは幼をさなごころ心にもそれが誰だかちやんと知つてゐた。そこ

から真直に向うに行くと、鐘楼——それは今でもある、その鐘楼の隣の不動堂、蠟燭の灯、読経の声、消えたことのない不斷の火、その賑かな光景の向うには、更に一層賑かな明るい灯、料理店、湯屋、三味線の湧くやうにきこえる音、月の光の下に巧い祭文語が来て、その周囲に多勢の男女を黒く集めてゐる——そこからその軽い艶かしい足音がやつて来たのであつた。

かれは黙つて経を前にして坐つてゐる……。と、ことごと音がする。唾で窓の紙をぬらす氣勢がする。黒い瞳をした二つの笑つた眼が其処に現はれた。

「慈海さん！」

かうその静かな声で言つた。

黙つてゐる。

「慈海さん！」

まだ黙つてゐる。

しかしかれは自分の小さな心臓の烈しく動くのを感じずには居られなかつた。二つにわかれた心、その幼い時ですら、かれはその「二つのわかれた心」を既に深く経験してゐた。その涼しい二つの眼ではない方の眼、可愛い涙をふくんだやうな眼、それでゐて怒るとこ

はい眼、さういふ眼をかれは恐れた。その眼がすべてかれの後にあるやうな気がした。

「慈海さん！」

また女は呼んだ。

「あとで、あとで……」

「そんなことを言つちや、いや——」

かう言つて頭を振つてゐるのが窓に映つて見える。

「ぢや、待つて……」

かう言つてかれは立上つた。

かれは其処を出て、この庫裡くり——囲炉裏ゐろりのあるこの庫裡に來た。今と少しも變らないこの庫裡に……。現に、その板戸がある。竹と松の絵けむりすが黒く烟に煤けた板戸が依然としてある。その庫裡に何のために？ その一つの心をわけた方の怒るところはい眼が何処にあるかを見るために——。

幸ひにその眼は其処にゐなかつた。かれはこつそりと玄關の戸を明けて、そして戸外へ出た。月の美しい夜であつた。樹と樹と重り合つた黒い影がところ／＼に紺かすりのやうなさまを展ひろげた。本堂の灯がぼつとりとさびしく見えた。

かれはあたりを見廻した。

其処にゐる筈の女の影が何処に行つたか見えない。屹度調戲^{きつとからか}ふつもりに相違ない。かう思つて静かに樹の影の中に入ると、影と影の重り^{かさな}合つた中に、更に濃い影があつてそれが動いてゐる。急に、微かに笑ふ声がした。つゞいてかれは柔かい女の腕^{かひな}の自分に絡^{から}みついて来るのを感じた。女の髪の毛がした……。

「慈海さん。」かう微かに女は言つた。

こんなことをかれはもう何年にも思ひ出したことはなかつた。それも、かれが深く恋したやさしい涙を含んだ眼の方を思ひ出さずに、却^{かへ}つてそれを思ひ出したといふことが不思議であつた。

その心が、そのやさしい心が、又は男を思ふ心が、今だに、二十五年を経過した今だに、そこに残つてゐて、その窓の下の空氣の中にちゃんと残つてゐて、そしてそれが自分の心に迫つて来たのではないか。かう思ふと、かれは不思議な一種の恐怖を感じた。

もう死んでゐるのかも知れない。弱い身体^{からだ}の女だつたから、おとなしい女だつたから、不仕合せな女だつたから……。と、その肉体が亡^{ほろ}びて、その思ひだけがその空氣の中に生きて動いてゐるのかも知れなかつた。そんなことはない筈だ。かう打消しても打消しても、

矢張それがついて廻つた。

ふと気がつくと、自分は蚊帳かやの中に寝てゐるのだつた。それは囲炉裏ゐろりのある隣の一間であつた。世話をする婆さんの寝てゐるいびきの音は向うの間まからきこえて来てゐる。蚊のぶん／＼唸うなる声が聞える。かれは容易に眠られなかつた。

「遠い昔だなア——」

かう思ひあつめたやうにしてかれは考へた。

此間も一度さういふことを考へたが、その夜もかれはかれ自身と放蕩はうたう無残な行為をした兄弟子との二つの生活をつづいて考へずには居られなかつた。兄弟子は慈雲と言つた。かれより四つ五つ上であつた。学問も出来て老僧の氣に入つてゐた。老僧の了簡れうけんでは、それを柔やさしい涙を含んだ眼の持主の配偶者にしようと思つたらしかつた。現に、かれが寺から東京へ、僧から俗へと移つて行つたのも半ばそのためであつたのであつた。十九でかれはそれまで学んだ仏の道を捨てた。それからそれへと種々いろいろなことをして歩いた。台湾にも行けば満洲にも行つた。仏の戒めた戒律をわざと破つて行くやうに見えるほどそれほど荒すさんだ生活をやつて来た。或は寺にゐられなくなつた兄弟子よりも、もつともつと烈しいデカダンの生活を送つて来たかも知れなかつた。

寺の世話人——今度此処にかれを伴^つれて来た寺の世話人に東京でゆくりなく逢^あつた時、かれは寺のことを聞き、老僧のことを聞き、兄弟子のことを聞き、最後に柔しい涙を含んだ眼の持主のことを聞いた。

「さうですか、K町に行つてゐますか。K町の商人の妻になつてゐますか。それは何より結構ですな……。子供は？　へゝえ、御座いませんか。一体、何方^{どちら}かと言へば体の弱い女でしたからな。」

かう何気ない風をしてかれは言つた。

世話人の話で、かれは始めてその寺の娘が兄弟子の妻にならなかつたことを知つたのであつた。世話人はつゞいて話した。「いゝえ、別にさういふわけではないんですけれども、……老僧のある中は、隠居してからも、先代は固かつたのですけれども。ふとしたことから……、さア、そのふとしたことは何ういふことかわかりませんけれど、兎に角、急にあゝいふ風に、悪魔でも魅^み入つたやうになつて了つたものだから。」

「娘の片附いたのは、老僧が死んでからですか？」

「いえゝ、貴方^{あなた}が寺をおいになつてから二年ほど経^たつか経たないほどです。」

「さうですか……」

意外な気がかれにはした。

それからそれへと種々なことを思つてゐる中に、かれはいつとなく睡眠ねむりの襲つて来るのを感じた。そのまゝぐつすりと寝込んで了つた。

朝起きると、日がもう高くあがつてゐた。婆さんはもうとうに起きて、広い勝手元で、昔のまゝの土竈どべつつひで、釜かまと火箸ひばしで朝飯を炊たいてゐるのを見た。何を見ても、昔のことが思ひ出されないものはなかつた。かれは夏草に半ば埋められた井戸を見た。本堂から山門につゞいてゐる長い敷石を見た。それも依然として元のまゝである。唯、その時分には掃除が綺麗に行届いて、その石に添つて松葉牡丹まつばぼたんの赤く白いのが長く見事に咲き続いてゐた。かれは横楊枝よこやうじで歯をみがきながら、鐘楼から、昔賑かであつた不動堂の方へと足を運んだ。そこでは不動堂の他ほかにかれは残る何物をも発見することが出来なかつた。門前町と言ふほどではないが、一時は両側に人家が並んで、参詣者さんけいしやがかなり遠い処からやつて来た。やれ護摩ごまをたけの、やれ蠟燭ろうそくを呉れのと云つて、かれも慈雲も忙しい思ひをした。しかもその人家は「時」の大きな手にすつかり掃はらつて取去られて了つたかのやうに一軒もそこに見出されなかつた。すつかり桑くは島はたけと野菜畑やさいはたけになつてゐた。何う考へて見ても、其処そこにあの遊蕩いうたうの気分が渦巻うづまき、三味線の音が聞え、赤い裾すそをチラホラさせた色の白い

女達が往来し、老僧は老僧で、同じ年とし恰好かつかうの世話人と一緒にあの湯屋の二階の女を傍かたはらに終日暮を打つてゐたとは思へなかつた。かれは不思議な気がした。瞬間も「址」あとをつくらずに置かない「時」が恐ろしいやうな気がした。そしてその「址」が唯だ「址」として埋められては了はずに、いつかその再びとみがへ蘇つて来ずには置かないやうな気がした。

かれはもう不動堂の中の荒廢した形をのぞいて見る元氣も何もなかつた。昨年のある時から習癖になつた恐怖——いつ襲つて来るか知れない災厄の恐怖がかれを少からず不安にした。かれは急いで庫裡くらりの方へと引返した。

四

自分ももう少しである「恐ろしい群」の一人になるところではなかつたか。あの時もし東京にゐたならば——。

外国でなければ見ることの出来ないやうな事件、乃至ないしは空想した口オマンスでもなければ出逢ふことの出来ないやうな事件、かれ等は皆な獣のやうに一人々々引き出されて、断罪の場にひかれて行つたのであつた。

意志の実行——意志の実行のために虐げられた人間の魂ではなかつたか。あらゆることを実行しても差支ない。世に罪惡と言ふものはない。惡と言ふものはない。唯自由があるばかりである。責任を負ひさへすれば——。かう言つたが、その責任が即ちかれ等の死ではなかつたか。

その意志の実行は、果して死を価値してゐたか否か。翻つて考へて見なければならぬ、余地はないか否か。かれ等は少くとも犬死ではなかつた。すぐれた芽を蒔いたには相違なかつた。しかしその芽を蒔かなければならないほどの必要をかれ等の魂は感じつゝあつたのであらうか。

かれは失敗して本国に帰る舟の中でそれを聞いた。かれはその時の烈しいショックを忘れることが出来なかつた。急にかれの世界は狭くなつたやうな気がした。其処にも此処にも自分を監視する眼がついて廻つてゐるやうな気がした。かれは自分の舟の本国に向つて航しつゝあるのを恐れた。かれは船室の中にのみ閉籠つた。

エイア・ブウルからは美しい碧い海が見えた。行つても行つても海である。掀翻し、飛躍し、奔跳する海である。その上には時には明るい朝日が照り、わびしい黄い夕日が落ち、赤い湧くやうな雲が浮んだ。「群」の人達の記憶は払つても払つても絶えずかれの

魂を襲つた。かれは時にはいつそ身を海中に躍らせようと思つて甲板の上を往来した。

——「何うです、一度故郷の寺に帰る気はありませんか。あなたが跡をついで下さるなら、それに越したことはないのですが、世話人達も、村の者共も、貴方ならば喜んでお迎へするにきまつてをりますが。」かうその世話人から言はれた時には、そこより他に、その古い人知らない田舎の廃寺より他に、自分の身を、体を置くところはないやうにかれは思つた。老師の魂が荒んだ自分の魂を救つて呉れるやうにすらかれは思つた。

かれは尠くとも落附いて考へて見なければならぬと思つた。これまでに自分のやつて来たことは、すべて皆な失敗に終つた。あらゆる悲喜、あらゆる事業、あらゆる思想、すべて皆な不自然であつた。自由を欲する——唯この一語にすら、かれはあらゆる矛盾と撞着を感じた。意志と魂との区別も、もつと深く静かに考へて見なければならなかつた。それには、田舎の山の中の寺、廃寺、何の束縛もないのが好いと思つた。余りに多く世に染まりすぎた。世間と人間とに捉はれすぎた。静かに休息させて下さるなら……一二年行つて見たいからといふ手紙をかれは世話人に書いた。

かれは郊外の或る家に置いた自分の書籍——かれやかれの「群」が一生懸命に読んだ書籍、パンの問題、精神の問題、自由意志の問題、さういふことを書いた沢山の書籍がある

日古本屋を呼んで売った。古本屋は何も知らない半ば老いた男であつた。この書籍の中に、人間の意志が、魂が、恐怖が、事件が、一々こもつてかくされてあるのは夢にも知らずに、平気でそれに評価をつけて、錢をちやらくそこに勘定して置いて、そしてそれを背負つて行つた。

かれはあらゆるものを捨てて、着物を入れた行李かうり一つを携へて、そしてこの故郷の寺へと来た。

五

寺に来てから、かれは種々いろくな人達に逢つた。世話人の重立つた人達、それは昔見た時よりも年を取り白髪しらがが多くなつてゐるばかりで、矢張或者は青めくらじま縞まの製織せいしに、ある者は小作の取り上げに、或者は養蚕やうさんの事業に一生懸命に携はつてゐるのを見た。世の中にあつた種々な大事件、恐ろしい戦争の殺戮さつりく、無辜むこのものの流るゝ血、乃至は新しい恐ろしい思潮、共同生活を破壊する個人思想、意志と魂との扞格かんかく、さういふものがこの世界にあらうなどとは夢にも知らずに、朝は早く起き、夜は遅く寝て、唯その家業にのみいそし

んでゐるのであつた。かれ等は広い世の中を知らなかつた。都会の生活をも知らなかつた。文明といふことも、新聞の上で見るばかりで、それが果して何んなものであるか、何ういふことであるかを知らなかつた。いろ／＼な恐ろしいこと、醜いこと、聞くさへ眉の蹙められるやうなことで、さういふことも、ほんの一時の黒雲の影のやうなもので、その耳目から早く／＼通過して行つた。そしてあとには田舎の平和がいつも残つた。

かれ等の若い者は、婚し、生殖し、生活して、唯年月を経て行くのであつた。かれ等は循環小数のやうに子供から大人になり大人から老人になり老人から墓になつて行くのであつた。春が来て花が咲き、秋が来て紅葉が色附き、冬は平野をめぐる遠い山の雪が美しく日に光つた。

「何うも今年は雨が少くつて、田植にも困つた。一雨来れば好い。」

かれ等は何百年前から繰返した黷の生えたやうな言葉をくり返してのんきに生活した。

勿論、その間にも、家々の浮沈がないでもない。それはかなりにある。ある家では息

子が放蕩で田地の半を失つた。ある家では養蚕に成功して身代がその三倍になつた。あ

る家では次男息子が学問好きで大学まで行つてこの夏学士になつた。かれの知つてゐる、かれと同じに遊んだ貧乏人の息子は、田舎ではどうすることも出来ないので、東京へ出か

けて行つて、種々の艱難辛苦を嘗めた挙句、貧民窟近くに金貸の看板をかゝげて、十年間に巨万の財産を造つた。今では東京に大きな邸宅を構へて、大名のやうな生活をしてゐるといふことであつた。

これが世の中の変遷である。しかし、さういふことが、さういふ表面の漣が、どれだけの意味を持つてゐるのであらうか。かうは思ふものの、かれは時々、「それが人生ではないか。それが本当の人生ではないか。自分のやつて来た生と死、恋愛、個人と自由、さういふことは、余り深く自己に執着しすぎたためではないか。」といふやうにも翻つて考へて見た。

「そんなことはない。」

かれはすぐかう打消した。

かれはあらゆる艱難の中をも、巴渦の中をも、恐怖の中をも通つて来た。そしてその中からすぐれた真珠の玉のやうな宝をつかんだと思つた。しかし、つかんだと思つたその珠は、いつの間にかかれの掌中から落ちて行つてゐた。

かれは時には一里ほどある町の方へと出かけて行つた。麦稈帽をかぶつた単衣に縋の古びた羽織を着たかれの姿は、午後の日の暑く照る田圃道を静かに動いて行つた。町は

市日^{いちび}で、近在から出た百姓がぞろ／＼と通つた。種物屋の暖簾^{のれん}は、昔と少しも異^{かは}らずに、黒い地に白く屋号をぬいて日に照されてゐるのを見た。氷屋の店では、赤い腰巻をした田舎娘^{なかもすめ}が二三人腰をかけて、氷水を匙^{さじ}ですくつて飲んでゐた。

ある店の前を通ると、

「慈海さんぢやないか？」

かうある婆さんがいきなり呼んだ。ちよつとはその誰であるかがわからなかつたが、暫くしてそれは不動堂の前の湯屋をした上^{かみ}さん——その時分は三十位でいきな如才^{かみ}のない上^{かみ}さんであつたといふことがわかつた。「まアお上り……歸つてゐるツて聞いたから、一度逢^あひたいとは思つてゐたんだよ。」かう言つてかれは無理に引上げられた。上さんは亭主に四五年前に死なれて、今は息子が家のことを万事やつてゐた。湯屋から町へ出て、今の小間物商を始めたといふことであつた。

話の中には再び昔の不動前の賑かな光景が蜃^{しん}氣^き楼^{ろう}のやうに浮んで来た。老僧、世話人、三味線、賑かな参詣^{さんけい}者^{しや}、上さんに取つてもその一時代は追憶の最も派手なものであるらしく、それからそれへといろ／＼なことが浮び出して来た。こつちから訊^{たづ}ねもせぬのに、寺の玄関の三畳の窓へ来た女のことをも上さんは話した。

「あれもな、不仕合せでな。足利^{あしかぎ}に行つてついこの間まで一人であつたが、今ぢや亭主でも持つたか何うか。」

かう上さんは話した。

其処を出てかれは猶^{なほ}あちこちと町を歩いた。上さんの話で、自分が長い年月種々^{いろく}な経験を体感した間に、この昔馴染^{むかしなじみ}の人達がいかに生活してゐたかといふことが漸く^{やうや}わかつて来たやうな気がした。かれは自分の辛い恐ろしいデカダンの生活を思ひながら、町の外れに出来た小さい停車場の方まで行つて見てそこから引返した。

六

かれが来て、最初にやつて来た葬式は、生れて一月しか経^たたないといふ子供の棺であつた。

「其処へ持つて来て置いたで、ちよつくらお経を読んで呉れなせい。」父親らしい男は庫^く裡^りの入口に顔を入れてのんきさうに言つた。

夕暮の色は既に迫つてゐた。

かれは外に出て見た。果して小さい棺が山門と本堂との間の敷石の上に置いてあるのが白くさびしく見えた。

かれは傍に行つた。

「穴は掘つてあるのか？」

「今、掘つてらあ！」

見ると、もう一人の男が墓地の方で頻りに鋤を動かしてゐるのが見えた。

「本堂へ持つて行つたら？」

「さうすべいか。」かう言つたが、「新しい和尚さんだで、餓鬼も浮ばれべい。」

こんなことを言つて、軽々とその棺を持つて、さながら小さな荷物でも運ぶやうにして、本堂の前の木階——それはひどく壊れた木階を上つて、賽銭箱の向うに置いてある棺台の上に置いた。

かれは古い僧衣に袈裟をかけて、草履を穿いて、廊下から本堂の方へと行つた。もう蚊がわん／＼と音を立ててゐた。歩くとそれがバラ／＼と顔に当つた。

かれは一本持つて来た蠟燭を取出して、それにマツチをすつて火を点した。本堂の中はもう真暗であつた。蠟燭の火は青くかれの鬚の濃い顔を照した。つゞいて奥に寂然

として端座してゐる本尊の如來にょらいの像を微かに照した。

流石さすがにかれは経を忘れなかつたが、しかし不思議な気がせずには居られなかつた。かれは読んで行く物の中に自分の遠い過去が再び蘇よみがへつて來たのを感じた。始めは静かであつた声は次第に高くなつて行つた。その声の中にはまだけがれない無邪氣な心が籠こめられてあつた。

暫くの間、その読経どきやうの声は、荒れたさびしい本堂の中にきこえた。

で、それがすむと、その父親は、そのまゝ小さな棺をかついで、サツサと墓地の方へ行つた。かれは不思議な気がせずには居られなかつた。かれはその姿の夕暮の闇の中に見えるなくなるまで見送つた。

「私は人間のことのすべてを知つてゐる。人間の犯した過去の罪を総すべて知つてゐる。」かう思ふと、かれは其処に落着いてちつとして立つてゐられないやうな心の恐怖を感じた。

急いで庫裡くりへと戻つて來た。

「何故なぜ、あの時、あの女はあの子を抱いて井戸に身を投じたであらうか。何故？ 何故？」かうかれは心の中に絶叫して、長い間その答を待つたが、竟つひにその答はやつて來なかつた。自己は自己である。愛した女だとして、自己の総すべてを占領することは出来ない。それが出來

ないために死んだとて、恨うらみを他に投げかけて死んだとて、それが誰の責任になるであらう。占領させなかつたこの自己がわるいのか。それとも又それを嘆いて子を抱いて死んだ女がわるいのであらうか。かれは其時は唯、「自己」に取とり縊すがつて強しひてその苦痛を処分した。しかしそれで完全にそれが処分され解釈されたであらうか。かれは今でもその溺おぼれた女と子供とが自分に向つてその解釈を求めてゐるのを覚えた。かれはぞつとした。

七

渡船小屋の雁木がんぎがずっと川に延びて行つてゐた。そこには船が一隻つな繋いであつた。人が五人も六人も乗つて、船頭の下りて来るのを待つてゐる。大きな河は伝馬てんまやら帆やら小蒸気やらをその水面に載のせてたぶくとして流れてゐる。櫓ろの声が静かに日中の晴れた水に響いた。

帆が鳥の翼のやうに大きく動いた。

土手の上には、人や車が陸続として通つてゐた。氷店、心ところてん太をけを桶に冷めたさうに冷して売つてゐる店、赤い旗の立つてゐる店、そこにある爺おやぢの半ば裸はだか体になつた姿、をりを

りけた、ましいい音を立てて通つて行く自動車、川の向うに見えてゐる大きな煙突から渦まきあがる煤煙、——ふと、「あれ、あれ！」とけた、ましいい声が起つた。

其方を振向くと、丁度、今二十位になる女が、派手な着物を着た女が、その渡船小屋の雁木の少し手前のところから水へと飛込んだ処であつた。

水煙がサツと立つた。

「身投げ！ 身投げ！」

かう言ふ声が其処此処から起つた。誰の心も皆なそれに向つて躍つた。

丁度その傍を大きな帆をあげた舟が通つてゐた。舵のところにあつた船頭もそれを見たらしく、急いで此方へとやつて来た。と、手が浮いた。浅黄がかつた着物と帯とが見えた。

しかし、船頭の持つた棹はそこに達しなかつた。

その手は、着物は又沈んだ。あとには大きな川のだぶたぶとした滑らかな水面。

「あゝもう沈んだ！」

「救けてやれ、おい船頭！」

暫くすると、

「南無阿弥陀仏——」

「可哀さうだわねえ。」

「まだ若いのに……」

かういふ声でした。誰も見てゐるに忍びないやうな気がした。

土手の上には、白樺^{しろかばいろう}色の蝙蝠傘^{かうもりがさ}と派手な鼻緒のすがつた下駄と……

かうした光景は其処にも此処にも起つた。広い世間には、かうして自ら殺^{みづか}すものが何人

あるかわからない。現に今でも、かうして寂^{じやくねん}然^{ぜん}としてかれが坐つてゐる間にも、さう

いふ悲劇が何処かで繰返されてゐるかも知れない。何のために、満たされざる心のために、

辛い辛い捨てられた心のために、痛い痛い刺戟^{しげき}のために……。

自ら殺さうとしたことの一度ならず二度まであるかれに取つては、さうしたサインが殊に堪へ難い刺戟を与へた。

それは近いことではなかつた。かれに取つてはもう遠い昔だ。しかしをり／＼その心の光景が描き出された。二つにわけられた心と二つに突詰めた心と、この心は実は一つである。わけられる心も突詰める心も同じ心である。その区別は唯境遇^よに由るのである。その時の存在の形によるのである。一と一とぴたりと合つたものは幸福である。一と二と合つたものは不幸である。しかし幸福と言ひ、不幸と言つても、それは共に外形であつて、も

う少し深く考へると、幸福なもの必ずしも幸福でなく、不幸なもの必ずしも不幸でない。何の故に？^{ゆゑ}一つと一つと合つたものも矢張もとは二つのもので、永久に一つであることは出来ないが故に——。一つと二つと合つたものも、遂には一に帰さなければならぬが故に——。

自己の持つたものを失ふの辛さ、自己の持ち得たと思つたものを失ふの辛さ、これほど辛いものはない。それがよく女や男を川へと伴れて行く……。

かれは其処まで考へて、大きな溜息を吐いた。そこに大きな欠陥があるやうな気がした。染まるべからざるものに染つて行く可能性を賦与した自然は？ 絶対に自己のものにする事の出来ないものを自己のものとなし得る可能性を賦与した自然は？ 満されたる心の飽満から生ずる倦怠^{けんたい}、餓^うやされたる心の寂寥^{せきれう}から起つて来る憧憬^{しやうけい}、これは実は一つであるのではないか。同じことではないか。

しかし満されざる心と餓やされたる心とは同じでない。飽満^{はうまん}と寂寥とは同じでない。倦怠と憧憬とは同じでない。それでゐてこれが同じであると言はなければならなくなるのは何の故であらう。死にまで深く染着^{せんちやく}した心は美しくはないか、勇ましくはないか、雄々しくはないか、また優しく悲しくはないか。これが人間の最後の「詩」であり且つ

「宗教」ではないか。

文明は虚偽を生んだ。デカダンを生んだ。勝者の権利を生んだ。「自己」を生んだ。現にかななどはそれを真向に振翳してこれまでの人生を渡つて来た。智慧を戦はして勝たんことを欲した。自己の欲するまゝにあらゆるものを得んことを欲した。そのために、かれには富んだもの栄えたもの主権を把持したものがその対象となつた。山も丘も平野も一緒に平らにならなければならないと思つた。

しかし平等は物質にあるのではない。人生と人性との表面にあるのではない。勝利者にあるのではない。智慧と手段とを戦はして勝つたところにあるのではない。かう考へると、「恐ろしい群」の人達のこと、再びかれの胸に迫つて来た。折角さぐり出した秘密の糸がそこでぽつり絶えてゐるのを感じた。

「あゝ、もうよさう、考へるのは止さう。もつと静かに休まなければならない体だ。何事をも捨てたやうに、この簇つて来る千万の考慮をも捨てよう……」かう思つて、かれは庫裡の一間から出て来た。

いつもゐるところに婆さんがゐない。道具と言つては唯これ一つしかないと言つても好い長火鉢、その上には鉄瓶がかゝつて、しかも沸え立つてプウ／＼白い湯氣を立ててゐ

た。

かれはそれに水を足した。

そしてそこにあつた下駄をつツかけて戸外^{おもて}に出た。

広々として美しく日にかゞやいた野がその前に展^{ひら}げた。夏のさかりの大地から湧^わき上る暑気は、草にも木にも一面に漲^{みなぎ}りわたつて、キラ／＼とかれの眼と体とに反射して来た。

畠^{かき}には笠をかぶつて百姓が頻^{しき}りに草を取つてゐた。

ふと昨夜^{ゆうべ}世話人がやつて来ていろ／＼に言つた寺の経営の話がかれの頭にのぼつて来た。

「兎^とに角^{かく}、昔から由緒^{ゆゑしよ}のある寺だから、この儘^{まゝ}かうして置くのは残念だ。何うか、貴方^{あなた}

が来たのを機会に、昔のやうには行かなくとも、本堂も修繕し、庫裡^{くり}ももう少し住み好いやうにし、寺としても余り人に馬鹿にされない寺にしたい。……中興の祖には、貴方^{ほか}より他^{ほか}になつて下さるものはないんだから。」かう言つて、重立つた世話人は、寺の財産や、

無住にして置いた間に出来た金や、乃至^{ないし}はその中から先^{せん}住^{ぢゆう}の借金を埋めた話などをして

た。かれはそれに対して深く心を留めてはゐなかつた。「段々さういふことにして……まあ、さう急がなくても好う御座んすから。」かうかれは静かに言つた。

かれの足は行くともなく墓地の方へと行つた。それもそこに行かうと言ふ意志がかれを

其処に伴れて行つたのではなかつた。かれは唯ぶら／＼と歩いて其方へと行つた。

墓地は昔と比べては頗る明るくなつてゐるのをかれは見た。それも先住がその後の杉森を伐つた為めであつた。女に対する愛欲の結果がかうした形に影響するといふことも、彼には不思議なやうな気がした。つゞいて先住と自分との生活がちよつと比べて考へられ、二人が嘗ては此処で同じ飯を食ひ、同じことを考へ、或は同じ寺の娘を恋したかも知れなかつたことがつゞいて頭に上つて来た。偶然——偶然。「本当に、偶然の二字でこれを解釈して了つて好いのであらうか。」

かれの今までの経験は、何も彼もその「偶然」で解釈された。考へて不思議の境に至ると、「これも偶然の事実だ。」と考へて、そして片を附けた。時には内心に不満足を感じ、余りに疑惑の伴はない薄い心を感じたこともないではなかつたけれど、それ以外に、その「偶然」以外に何う解釈して好いかわからないので、有耶無耶の中にその不思議な心理を抑塞した。

それに、その「偶然」と考へる処に、あらゆるものを「無意味」にしてしまふところに、一種微妙な科学の権威があつた。また肯定された科学の不思議があつた。敢て深く入つて行かないところに、勇ましい男らしさと誤りのない精確さどがあつた。知らないものは知

らないものとしてこれから研究しよう、報告しよう、知らないものを知り得ると考へるやうな危険な直覺は成るだけ避けよう。かう考へたところに、「偶然」の価値があるのであつた。しかしかれがこれに不満足を感じ出したのはもう余程前のことである。女と子供の溺死体を見た以来のことである。……突然かれの心は内から外に向つた。墓があらはれて来たのであつた。

要^{かなめがき} 垣^{みどりば}の緑葉^{かこま}に囲れた墓があるかと思ふと、深い苔蘚^{こけ}に封じられた墓が現はれて来た。新しい墓もあれば、古い墓もある。或は五輪塔型、或は多宝塔型、其他いろ／＼な型がある。或は倒れてゐるのもあれば、長い間の風雨を平気で凌^{しの}いで来たらしいものもある。中にはその墓石の表面に仏像が刻まれてあるものなどもあつた。かれは立留つて一つ一つその墓を撫^なでて行きたいやうな気がした。

かれは茫^{ぼう}然^{ぜん}として立尽した。

このかれの立つてゐる向うに、深い深い草藪があつて、その中に黒い暗い何年にも人の入つて来たことのない古池が湛^たへられてあつた。そこには雲の影も映らなければ、日影も滅^{めつた}多にはさして来ない。しかも人知れず埋^{うづも}れたその池の中にも、生物は絶えずその生と滅とを続けてゐるのであつた。夜は蛙^{かはづ}の鳴く声が喧^{やかま}しくそこからきこえた。

八

新しい住職の世話をするために来た婆さんは、始めの一人は十日ほど経たない中に、世話人の許もとに行つた。

「国から急病人があると言つて来たもんですから。」

かう言つて、二三日の暇ひまを貰つて行つたが、日限が来ても、その婆は竟ばいあつひに歸つて来なかつた。二人目も五六日で暇いとまを乞ひに世話人の許もとにやつて来た。

三人目、四人目……。

世話人は訊きいた。

「何うして、さうだらう。何か和尚をしやうがいやなことでもするのかな？」

「いゝえ。」

別にさうしたことがあるのでもないらしかつた。ある婆さんは言つた。「でもな、ひとりぢや淋しいだ。和尚さん、何も言はないで、一日自分の室むつこに引籠ひっこんでゐて、話もしねえから……」

「出て来ねえか。」

「出て来ねえどころか、飯に呼んでも、それがすむと、すぐ居間に入つて行つて了ふでな。」

「本でも読んでいるのか？」

「いや、本なんか一冊もねえ。」

「ぢや、物でも書くのか？」

「書きもしねえ。」

「それぢや唯ごろ／＼してゐるのか？」

「唯、一日中ちやんと、机に向つて坐つてゐるだ。」

かう言つて、その婆さんは、比較的くは詳しくかれの平生へいぜいの状態を世話人達に話した。葬式が来ると、古びた僧衣ころもを引かけて、黙つて本堂に行つて、いつものやうにお経を読んで、それがすむと、そのまゝ元のやうにその居間へ行つて坐つた。

「朝のおつとめは？」

「朝のおつとめなんかしねえ。」

「ぢや、葬式のときり、お経はよまねえんだな？」

「さうだな、まア、よまねえつて言ふ方が好いだんべいな。それでも、此間、雨のふるさ
びしい日に、何うした拍子か、大方和尚さんも淋しかつたんだんべい。本堂でお経を
上げてゐる音がするから、不思議に思つてそつと行つて見ると、本尊様の前で、一生懸命
にお経を読んでゐるだ。それもいつもの葬式の時などに読むやうな小さな声ぢやねえだ。
大きな声で、後に私が行つて見てゐるなどは夢にも知らねえで、一生懸命に読んで御座ら
つしやる。……不思議な気がしたにも何にも……」

「淋しいんだな、矢張……」

「淋しかんべいよ。」

世話人達は、これでは駄目だと思つた。折角、寺の復活を考へて伴れて来たが、これ
では駄目だ……。しかし、一人あゝして放つて置くといふことが間違つてゐるのである。
何処の寺でも、今では女房子を持たないものはない。和尚にも一人相応なのがあつたら、
持たせるに限る……。かう世話人達は寄り合つて相談した。

しかし、あの寺に、あの廃寺に、本堂に雨が洩り、庇が落ちてゐるやうな寺に、誰が女
房になりに来るものがあるであらうか。「とても来手はねえな。すたり者のねえツていふ
女つ子だ。誰が物好きにあんな寺に行つてさびしい思ひをするものがあるもんか。」かう

そこから出て来た婆さんは笑ひながら言つた。

世話人は猶なほいろ／＼なことを婆さんから聞いた。誰もたづねてくるものはないか。郵便は来ないか。又誰か訪たうねて和尚は行きはしないか。——その答はすべてNo.2であつた。

ある日、世話人は二人して出かけた。一人はかれを都から此処に伴つれて来たものであつた。かれ等は庫裡くりから入つて行つた。婆さんに出て行かれたかれは、ひとりぼつねんとして庫裡くりにゐた。かれはひとりで土鍋どなべに飯を炊たいて食つてゐた。

「何うも世話をするものがなくつてお困りでせう？」

かう一人が言ふと、

「いや——」

「何うも矢張、お寺はさびしいと見えて、落附いてゐるものがなくつて困りましたな。」

「いや——」

「さぞ御不自由でせうな。」

「いや、別に……」

鬚ひげの深く生えたのを剃そらうともせず、青白い肌膚はだの色をその中から見せて、さびしげにかれは笑つた。

世話人達が齎^{もたら}して来た話を聞いた時には、かれは何等の答をも与へなかつた。

かれは唯笑つた。それも快活に笑つたのではなく、にやにやと笑つたのもなく、反抗的に冷かに笑つたのもなく——唯、笑つた。

暫くしてかれは言つた。

「まア、暫く、かうやつて、落附かせて置いて下さい。……イヤ、世話するものなぞはなかつても好^よう御座んすから。」

「でも、相応なのがあつたら、一人お貰ひになる方が好う御座いませう。貴方だつてまだお若いんだから。」

「まア、その話は、もう少し先に寄つてからにして戴きませう。」

それより他に何も言はないので、世話人達は止むを得ずに引返した。

世話をする婆さんもうやつて来なかつた。かれは一人でその廃寺の中に埋れたやうにして住んだ。

小さな土鍋、一つの茶碗に一つの味噌椀、皿はところどころ欠けたのが二三枚あつた。腹が減ると、かれは立つて行つて、七輪に火を起した。

時には以前の生活がかれの心に蘇よみがへつて来た。新しい思想のチャンピオンであり、「恐ろしい群」の第一人者であり、デカダンの徒の一人であつたかれが、かうして田舎あなかの廃寺の中にひとり生活してゐるといふことが不思議に思はれた。広い世間にも、かれ程有為うゐてんべん轉變の生活を送つたものはないであらう。また明るい影と暗い影と互に纏もつれ合つた生活をしたものはないであらう。罪惡と慈善との一緒になつた生活をしたものはないであらう。彼の心は時には一人の孤兒の爲め、一人の飢ゑた者のために振ひ立つた。また或時は欲求した染せんちやく着ちやくした心の虜とりことなつて、美しいものすぐれたものに向つてその魂を浪費した。かれは本当なもの真剣なものの探検者であつた。本当のものを求めるためにかれは水火の中に入ることをも辞さなかつた。虎穴に向つて突進して行くことをも辞さなかつた。ふとかれは考へた。「かうした今の生活も矢張その探検者の心ではないか。虎穴に向つて突進して行くものの心ではないか。」

さうだ、それに相違ない。昔は、聖者はあらゆる苦行きやうを行なした。一生を苦行うちの中に終つた人達もあつた。婆羅門ばらもんの徒の苦行——そこまで考へて行つてかれは思つた。自分のこれまでの生活は、あらゆる苦行ではなかつたか。あらゆる忍苦ではなかつたか。放蕩はうたうもまた苦行、殘忍無殘もまた苦行、デカダンもまた苦行、「恐ろしい群」もまた苦行、歡樂も

また苦行ではなかつたか。美しい女の肌に触れ、美酒にあくがれ、音楽に心を蕩とろかしたのも亦また苦行ではなかつたか。

山海の珍味を尽し、美を尽し、善を尽し、出るに自動車あり、居をるに明眸皓齒めいぼうかうしあり、面白い書籍あり、心を蕩とろかす賭博とばくあり、飽食し、暖衣し、富貴あり、名譽あり、一の他の不満不平あるなくして、それでも猶なほ魂に満されざる声を聞くのは何の故か。かうしたことも亦苦行の一つであるからではないか。

ふとある光景がかれの眼の前に起つた。それは恐ろしい光景であつた。弱きものの虐しへたげられ、滅ほろぼさるゝ光景であつた。数本の足——或は毛深い、或は青白い、或は滑なめらかな数本の足がだらりと空間に下つて見られた。かれは思はず手を合せて、口に経文を唱となへた。

次第に幼い頃の空氣がかれの心の周囲に集り且かつ釀かもされて来るのを覚えた。最早始めに來た時に感じたやうな「孤独」と「寂寥せきれう」とをかれは感じなかつた。また華はなやかな面白い「世間」に向つて引戻さるゝやうな心をも感じなかつた。

飢うゑを覚えた時に、かれは始めて立つて、七輪の下を煽あふいだ。また、世話人の持つて來て置いて行つて呉れた四角の小櫃こびつの中の米をさがした。

夕暮になると、夥おびたゞしい蚊が軒に蚊柱を立てた。室へやの中を歩いて、それがバラ／＼と顔

に当るほどである。かれは思つた。「これも自分と同じ生物だ。飢ゑたがために食を求め
てゐるものの声である。でなければ、生殖のために、不可解の生命の連続のために盲目の
恋をしてゐるものの声である。生命のために冒険をしてゐるものの声である。『恐ろしい
群』の人達のあげた悲鳴と同じ悲鳴を挙げるものの声である。」

かれは思ひつゞけた。

「しかし、この冒険のためには、盲目の恋のためには、食を求めるためには、生死を問題
にしては居られない。従つて、かれ等にとつて、生死はその運不運であり幸不幸であるの
は勿論である。しかし、更に一步を進めて考へて見る。運不運ではあり、幸不幸ではあ
るけれども、それ以上に生の力が、盲目の生の力が肯定されてゐるではないか。生死を問
題にしてはゐられない境があるではないか。扞格した力の上に起つて来る悲劇は、これ
は何うも致し方がない。」

かれは苦行といふことについて、三日も四日も考へた。「苦行は僧や婆羅門の徒の行す
るものばかりではない。人間はすべてこれを行してゐるではないか。意識せると、意識せ
ざるとの区別はある。蚊の食を求めるのもまた是れ行、盲目の恋をするのも亦これ行、生
死も亦是れ行ではないか。」

かうしてゐる中にも、時は経^たつて行つた。ある夜は凄^{すさま}じい風雨がやつて来た。本堂ばかりではない、自分の居間にも雨が盛^{さかん}に洩^もつた。

かれは裸^{はだからふそく}蠟燭に火をつけて、それを持つて立上つた。あまりに凄^{すさま}じい音に起されて、その光景を見ようとかれは思つたのである。

破れた雨戸から雨が礫^{つぶて}のやうに降込んで来た。従つて何処も濡^ぬれてゐないところはなかつた。廊下に出ようとすると、風が凄^{すさま}じく吹いて来て、手に持つた蠟燭^{あやふ}は危^{あやふ}くそのために消されようとした。

かれは袖^{そで}でそれを蔽^{おほ}つた。

廊下には裏の林の木^この葉^はが雨に濡^ぬれて散り込んで来てゐる。銀^{ぎん}箭^{せん}のやうな雨脚が烈しく庭に落ちて来てゐるのが、それと蠟燭^{ろうそく}の光に見える。裏の林は鳴つて、枝と枝との触れる音、葉と葉とのする音が一つにかたまつて轟^{ぐわう}と言^いふ音を立てた。空は墨を流したやうに暗かつた。

ともすると風に吹き消されさうになる裸^{はだ}蠟燭を袖^{そで}で護^{まも}りながら、一步步々長い廊下を歩いて行くかれの蒼^{あをしろ}白^{ひげ}い鬚^{ひげ}の深い顔が見えた。それは丁^{ちやうど}度^ど罪惡の暗^{あん}い闇^や夜^やに辛^{あつ}うじて仏の慈悲の光を保つてゐるやうに、又は恐^{おそ}ろしい心の所有者が闇の中に怖^{おそ}れ戦^{をの}いてゐるかの

やうに……。

廊下の途中で、かれはまた^{すさま}凄じい風雨の吹き込んで来るのに逢^あつて、立留つて、その蠟燭の火を保護した。

轟^{ぐわう}といふ音、ザアと降る音、それがあとからあとへと続いてやつて来た。樹の鳴る音、枝の撓^{たわ}む音、葉の触れ合ふ音、あらゆる世の中の雑^{ざふ}音、悲しいとか侘^{わび}しいとか辛いとか恨めしいとかいふ音が一齐に其処に集つてやつて来たやうにかれは感じた。

かれは漸^{やうや}く長い廊下を通り越して、本堂へ入つて行く扉の前に行つて、静かにそれを明けた。

闇にもそれと見える屋根や庇^{ひさし}の壊れたところから、車軸のやうに雨は落ちて来てゐた。

堂の板敷はすべて水で満たされてあつて、それに、かれの手にした蠟燭が微かに照つた。

この風雨の凄^{すさま}じい音の中に、この洪水^{こうずゐ}のやうになつた大破した堂宇^{だうう}の中に、本尊の如^に来仏は寂^{じやく}然^{ねん}として手を合せて立つてゐられるのである。かれは自分の体が、魂が、

又は罪惡が、欲望がすっかり仏に向つて靡^{なび}いて行くのを感じた。かれはこの世では見ることも味^{あぢは}ふことも出来ない光景に出逢つたやうな気がした。かれの口からは思はず仏を念ずるの聲が出た。

贖罪——神の贖罪、仏の贖罪と言ふことが、漲るやうに、今迄つひぞ感じたことのないほどの強さを以てかれの総身に迫つて来た。かれはそのまゝ手にした蠟燭を燭台の上に立てて、そのまゝ仏の前に来て坐つた。

一しきり読経の聲が風雨の吹き荒るゝ中に聞えた。

九

新しい覚醒が来た。

恐怖を感じ、寂寞を感じ、孤独を感じ、倦怠を感じた時にのみ仏の前に行つて手を合せたかれは、今では自ら進んでその本堂の本尊の前に行くやうになつた。最早かれの読経はかれのための読経ではなかつた。また仏に向つて合掌するかれの手は、かれのための合掌礼拝ではなかつた。新しい力はいかれの魂を蘇らせた。かれはかれの後半生を仏の功德を讃するために用ゐることを悔いながつた。

不思議の心理ではないか。また不思議な顛倒ではないか。かれは今まで消極的であつた自己を最早何処にも見出すことが出来なかつた。かれを苦しめたあらゆる幻影、恐ろし

い溺死の光景、恨を含んだ心の形のあらはれた光景、絞首の刑に逢つた「恐ろしい群」の人達の光景、さういふ無限のシインは最早かれを脅かすことはなかつた。新しい力は満ちた。

貧、苦、乏、病に満ちた世界である。それは皆な我に着いたために起つて来たあらゆる光景である。ある国はある国と争つて、無辜の血を流してゐる。ある人間はある人間と争つて、互に虚偽の勝敗を争つてゐる。デカダンはデカダンと相食んでゐる。悪と悪とは互にその牙を磨いてゐる。それは皆な我に着した処から起つて来る。現に自分すらその染着を捨てることが出来なかつた。捨てることの出来ないがために、かれは「幻影」に脅かされた。この「幻影」——あらゆる世間の人達を絶えず苦しめるこの「幻影」のために、仏の前に手を合せなければならぬと思つた。

ある日は殆ど一日本尊の前に行つて読経した。世話人がやつて来て、用事を話さうとしても、かれは竟に其処から立上らうとしなかつた。世話人は仕方がないので、一度帰つてそして又やつて来た。矢張かれは読経を続けてゐた。

寂然として端坐してゐる如来像、それはもう昔の単なる如来像ではなかつた。ある時ある人の手で鑄られたブロンズの仏像では猶更なかつた。かれは其の端麗な顔に、

人間の慈愛を発見し、その威厳を保つた表情に人性の根本に横つた金剛の相を発見した。そしてまたその寂滅じやくめつの姿には、着したものを拭ひ去つたあとの不動不壊ふどうふゑの相の名残なごりなくあらはれてゐるのを発見した。今まで広い空間に孤独を歎き、一人を歎き、自然の無関心なげを慨いた自己は、杳はるかに遠い過去に没し去つた。今はその如來の像はかれに向つて話し懸けた。又かれに向つて微妙不可思議みめうの心理を示した。

仏の前に端坐読経してゐる時ばかりではなかつた。日常の坐臥進退にも、その本尊は常にかれと俱ともにあつた。かれと俱に笑つた。かれと供に語つた。古い長火鉢の前に坐つた時にも、七輪の下を煽あふいでゐる時にも、暗い夜の闇の中に坐つてゐる時にも、をりくゝ颯風はやてのやうに襲つて来る過去の幻影の混乱した中にも……。

かれの姿はをりくゝ寺の境内けいだいの中に見えた。幾日も頬かみそりに剃刀を当てたことがないの
で、鬚ひげは深く顔を蔽おほつた。誰が見ても、かれが此処にやつて来た時の姿を発見することが出来なかつた。かれは夥おびたゞしく變つた。

かれの立つてゐる垣かたはらの傍には、紅白の木槿むくげの花が秋の静かな澄んだ空氣を彩いろどつて咲いてゐた。

十

「何うかしたな。気がふれたぢやないかな。」

かう世話人は言つた。

「あゝして一人であるんだから、それも無理はないな。困つたもんだな。此頃は丸で此方^{こつち}の言ふことなどは取り合はないつて言ふ風だからな。」

かう言つて、ある人は首を傾けた。種々^{いろく}な人々が種々のことを言つた。

米をきまつて運んで行く一人は、「此間なんか、つい自分の忙しいのにかまけて、二三日米を持つて行くのを忘れてゐて、あわてて持つて行くと、もう櫃^{ひつ}には米は一粒も残つてゐない。あの和尚^{をしやう}め、一日二日米を食はずにゐたと見える。」

「それで何とも言つて来ないのか。無けりや、乾干^{ひぼし}になつても食はずにゐるのか。何うしても変だな、不思議だな。」考へて、「此頃は前よりも一層何も言はなくなつて了^{しま}つた。

前には寺のことなどいろ／＼心配したり何かしたが、此頃では、もうそんなことは少しも言はない。唯、黙つて聞いてゐる。困つたものだな。」

寺の近くに住んでゐるある百姓の鼻^{かいあ}は言つた。

「すっかり變つて了つた。もう元のやうな姿はなくなつた。そして、いつでもお経べい読んで御座らつしやる。此間、本堂の前で出会でつくはしたから、お辞儀をしたが、黙つて莞爾にこくと笑はしやつた。えらく瘦やせなすつたな。」

それでゐて、葬式が行くと、どんな貧乏なものでも、乃至ないしは富豪でも、同じやうな古い僧衣ころもを着て、袈裟けさをかけて、そして長い長い経を誦ずした。そしてその声も始めに比べて、次第にその声量を増し、威嚴を増し、熱意を増して来るのを誰も認めた。淋しい大破した本堂の中に漲り渡る寂滅じやくめつの気分は、女や子供、乃至ないしは真面目に考へる人達の心を動かさずには置かなかつた。他の寺の僧達の誦ずした読経どきやうではとても味ふことの出来ない微妙みめうな深遠な感じに人々は撲うたれた。

さま／＼の評判うちの中に、秋は去り、冬は来た。木の葉は疎々そゝとして落ち、打渡した稲は黄く熟きいろした。ある朝は霜しもは白く本堂の瓦の上に置いた。村の人達は段々朝毎あさごとの寺の読経ねむりの声に眠ねむりをさまされるやうになつた。

「浄乞食——浄乞食。」

口の中にかう言つて、かれは僧衣ころもの上に袈裟けさをかけて、何年ともなく押入の中に空しく
 転ころがつてゐた鉄鉢てつぱつを手にして、そして出かけた。

かれは藁草履わらざうりをつツかけて穿はいた。かれは寺を出て、一番先に、近所にある貧しい長
 屋かどの人達の門に立つた。

破れた笠かさの中からは、かれの熱した眼が光つた。

「才、才、オー、オー。」

と言つて鈴を鳴した。

ある老婆が、最初に五厘錢を一つその鉢の中に入れた。

かれに取つては、それは最初のまことの喜捨であつた。かれは老婆の冥福めいふくを祈つて長

い間読経した。

「乞食坊主、乞食坊主——」

あるところでは、大勢の子供達がかれの周囲まはりを取巻いた。

かれはをりく路の真中に立留つて読経した。

家から家へとかれは行つた。ある家では、

「まア、お寺の和尚ぢやないか。托鉢たくはつに出なすつたがな。世話人たちは何うしたんぢやな、米も持つて行つて置かないと見えるぢやな、もつたいない。」などと言つて、袋に入れた米を渡した。

かれの眼には、到いたるところでいろ／＼な光景が映つた。收穫の忙しい庭、唐箕たうみのぐる／＼廻つてゐる家、あるところでは、若い女が白い新しい手拭で頭を包んで、せつせと稲を扱こいてゐた。誰も彼も世のしわざにいそしんでゐた。しかし、この穏かな平和な田舎あなも、それは外形だけで、争鬭、瞋恚しんい、嫉妬しつと、執着しふちやくは至る処にあるのであつた。道ならぬ恋の罪惡、乾くことなき我慾の罪惡、他を陥れなければ止まない猜疑心さいぎしん、泥土でいどに蹂躪じうりんせられた慈悲、深く染着せんちやくしつつもその染着をわるいと思はない心、さういふ光景は一々かれの眼に映つて見えた。

ある大きな家では、かれは長い間立つて読経どきやうした。

「出ないと言ふのに、うるさい坊主だな！」

かういふ主婦の尖とがつた声がした。

「やれよ、やれよ、一文やれよ、うるせい坊主だ。」

かういふ主人らしい男の声が奥からきこえた。

やがて五厘銭は投入られた。

しかしかれは読経の声をやめなかつた。また容易にそこを立去ることをしなかつた。静かにかれは読経をつづけた。

かれ自身にもそれはわからなかつた。何ういふ理由で、その家の前で、さうして長く立留つて読経しなければならぬかと言ふことが解らなかつた。不思議の奇蹟きせきがかれの心の周囲をめぐるた。

幼時に習つた経文に書いてあつた奇蹟、そんなことがあるわけがないと思つたやうな奇蹟、それが今不思議の事実としてかれの前にあらはれて来た。古来存在した幾万億の仏達、菩薩達ぼさつ おこなひの行が、言葉がかれの心に蘇よみがへつて来た。

かれの姿はあちこちに見えた。時には寒い碧い色をした小さな沼の畔ほとりの路に見えた。時には川添かはぞひの松原のさびしい中に見えた。かと思ふと、ある小さな町の夕日を受けた家並やなみの角に見えた。

寒い西風の吹き荒るゝ路を静かに歩いて通つてゐたりした。

かれは日毎に出懸でかけては、家々の軒に立つた。

辛い悲しい生活をかれは其処此処で見かけた。しかしさうした生活以上に我々人間の

切なことがあるのを誰も知らない。人々はそれを知らないがために苦しんでゐる。慨なげいてゐる。その無智な、無辜むこの人達のために、殊にかれは手を仏に合せなければならぬことを思つた。

ある寒い夕暮に、かれは自分の居間で黙つて坐つてゐた。かれの衣ころもは薄く且かつ汚れてゐた。破れたところをかれは自分で処々つぐろ繕つて着た。

「御免なさい。」

かういふ声がした。

しかしそれはやさしい声だ。若々しい女の声だ。この頃では、世話人ももう滅多めつたにはやつて来なかつた。かれ等は自分の勝手に托鉢たくはつに出たかれの行為を不快に思つた。「あゝいふものに構つてゐては仕方がない。」かうある者は思ひ、ある者は、「余りに勝手だ。何うかしたに違ひない。」と思つた。寺には人はつひぞやつて来なかつた。

「御免なさい。和尚をしやうさん、お留守ですか。」

かれは顔を其処に出した。見たこともない二十三四の若い女がそこに来て立つてゐた。

「何か？ 用？」

女は顔を赧^{あから}めたが、抱へて来た包の中から、一枚の綿入を出した。新しくはないが、綺麗に洗ひ、縫ひ畳んだ綿入を……。

「失礼ですけれども、これを和尚さんにさし上げたいと思ひまして……。私が心がけて、この間から洗つたり縫つたりしたものです。どうか、私の些^{いさ}かばかりの志^{こころざし}だけを納めて下さいませ。」

かう言つた女はまた顔を赧^{あから}めた。かれは深く心を動かされずには居られなかつた。かれは凝^{ぢつ}と女を見詰めた。

「志ばかりで御座いますから、何うか……」

「これは難^{ありがた}有^ういお志だ。」

かう言つたきりで、かれの眼から涙がにじみ出さうとした。

しかしかれは何も言はなかつた。黙つて礼^{らい}拝^{はい}合掌した。

十二

「ヤア、また、あの乞食坊主が何かしてらあ……」

かう言つて人達は其方そつちの方へと走つて行つた。それは町の角である。長い町を通つてこれから寒い風の吹く野に出ようとする角である。通りかゝつた荷車や人足や女子供などが一杯に其処に立留つた。

深い鬚ひげの中に明るく眼をかがやかし、破れた僧衣ころもに古い袈裟けさをかけ、手に数珠じゆずを持つたかれの前には、二十八九になる一目見て此処等到大勢ある茶屋女だとわかる女が、眼に涙を一杯に溜めて、そして矢張手を合せて立つてゐた。

「坊主、女でもだましたかな！」

かうした悪声を放つた人達も、そこに来て、その状態を見ては、思はず不思議な思ひに撲うたれた。

女は合掌して涙を流してゐる。そしてその前にゐる一人の乞食坊主——汚い坊主が神か仏でもあるやうに、それに向つて随喜ずゐき渴仰かつかうしてゐる。

かれは唯黙つて読経どきやうした。

かれは五六日前に、その女の抱へられてゐる小さな料理屋の門かどに立つた。それは夕暮で、これから忙しくなうとする頃であつた。奥には、もう客が二組も三組も来てゐた。そこの上かみさんは、面倒だと思つたかのやうに、一錢をその鉄鉢てつぱつの中に入れてやつた。しかし

かれは容易にその読経どきやうと祈念とをやめなかつた。かれの心がこの門に引かれたと同じやうに、かれの読経の声に心も魂も帰依きえせずにはゐられないやうな女が其処に一人ゐたのであつた。それはかの女であつた。男に對する苦痛と罪惡とに日夜虐さいなまれ通しで生きて來たかの女であつた。かの女はその重荷に堪へかねた。

かの女は店から外に出て來て、かれの前に跪ひざまづいて合掌した。

その話を聞いた時には、そこに集つた人達は皆な不思議な思ひに打たれた。

トボくと野に向つて行くかれのさびしい姿を人々は見送つた。

「本当かな！」

「本当ですともな……。あの和尚をしやうさんは、普通の和尚さんではない。あゝして托鉢たくはつして歩いてゐるけれども、苦しい辛い罪惡がある家の前に行くと、きつと立留つて長くお経を読んでゐる。きつとそれが中あたる。そのお経の声がちつとその人の胸にこたへる。現に、私なんかも、その一人で御座います。私は心中をしました。男が死んで自分が生き残つたのです。その時は別に何とも思ひませんでした。好いことをしたとも思ひませんが、生命いのちがあつて好かつたと思ひました。しかしそれが何どんなにその後私を苦しめましたか。私は行く先々で、きまつて男から心中を誘はれました、男がそのために生命いのちを失つたものは一

人ではありません。そしてその度毎に、私はいつも生残つて来るのでした……。あゝ、もうしかし、生きた仏に逢つて、この苦悩を救はれました」。かう言つて女は手を合せて数珠を繰つた。

「あの和尚さんは仰しやつた。一度心中しそなつたものは永久に心中のしそなひをするものだ。姉を姦したものは、又必ずその妹を姦するものだとかう仰しやいました。あの和尚さんは私の苦しみを救つて下すつた。仏に向つて手を合せるやうにして下すつた。生みの親の恩よりもつと深い。」かう女は群集に向つて言つた。

不思議な思ひに満たされた群集の上に、薄暮の色は蒼く暗く押寄せて来た。

十三

不思議な乞食坊主の話は、時の間にそれからそれへと伝へられて行つた。ある者は否定した。ある者は肯定した。

否定したものは、「今の世に、そんなことがあつて堪るものか。それは丁度その女がさうした苦痛を持つてゐたからだ。自分の影だ。自分の影を見て驚いたに過ぎない。」

と言つて笑つた。

「そんなことを言つて、良民を迷はすものは、捨てて置かれる。第一、人の門に立つて乞食をするさへ邪魔なのに、その家の内部まで見透かしたやうなことを言ひふらすのはけしからん……。警察で取りしまつて貰はなければならん。」

かう敦圀いきまいて言ふものなどもあつた。慈海の生立おひたちを知つてゐるものは、「あの坊主、二十年振りで国に歸つて来たが、その間には何をやつて来たかわかりやしない。風説によると、何処にも行きどころがなくなつて、それであの寺に入り込んだつていふ事だ。油断がなりやしない。現に、ちよつと見てもわかる。薄氣味のわるい眼をしてゐるぢやないか。」などと言つた。しかし中にはかれの不断どきやうの読經どきやうやら、寺に来てからの行状かじよくやらから押して、普通の僧侶——其処等かゝあにざらにある噂わさを持ち、被布ひふを着、稼穡かじよくのことにのみ没頭してゐる僧侶とは違つてゐるのに眼を留めるものなどもあつた。ある大きな青縞めくらじま縞やの主人はその一人で、その家の門に慈海の立つた時には、いくらか尊敬の念を以つて、その姿と行動を凝視した。成ほど世間の評判のやうに、その読經の声に深く人の魂を引附けずに置かないやうに深遠微妙みめうの調子を持つてゐるのをかれは見た。

「兎とに角かく、普通の僧侶とは違つてゐる。」

かうかれは人々に話した。不思議な乞食坊主の話は、次第に村から町、町から野へとひろがつて行つた。

ある日、また一場の話が^{つたは}伝つた。それは町の外れに住んでゐる鋤^{すき}や鎌^{かま}や鍬^{くは}などをつくる鍛冶屋の店での出来事であつた。鍛冶屋の亭主は^{がんじよう}巖乗^{いんじよう}な五十男で、これまでつひぞ寺にお詣り^{まゐ}したことなどはない男であつたが、その坊主が来て門に立つて読経^{どきやう}してゐると、^{たちま}忽ち深い感動に心を動かされたらしく、仕事をしてゐた金挺^{かなてこ}の手を留めて、いきなりその前に行つて、随喜合掌した。

それを見てゐた弟子や唄は^{びつくり}吃驚してそれを人々に話した。

鍛冶屋の亭主は、聞く人がある度毎に言つた。

「俺^{おら}にもわからない。しかし、俺ア、あのお経を聞いて手を合はせずには居られなくなつた。実際、俺ア、何も知らずに来た。わるいこともわるいと思はずにこれまでやつて来た。女も何人泣かせたかわかりやしねえ。弟子共にも薄情の真似をした。親には殊に不孝をした……。泣いても悔んでも足りねえやうな不孝をした。不思議だ。金挺^{かなてこ}を持ちながら、あのお経を聞くと、急にそれが堪らなくなつて、自分で自分を忘れて、そして飛び出して行つた。えらい和尚さまだ。生^{いきほとけ}仏だ。この恩は忘れられない。これからは俺は善人だ

。」「
かう言つて涙を流した。

これに限らず、さうした不思議の話は、その近所の町と村とを中心にして波動のやうにして伝つて行つた。つたはある時はひそかにあによめ嫂に通じてゐた小商人こあきうどの店にあらはれて、それをして悔い改めさせた。ある時は長い間人知れず自ら咎めてゐた殺人の罪を持つた男をしてその胸を開かしめた。父親て、おやの子を生んだ娘は泣いてその汚れた袈裟けさに縋すがつた。

その冬から春にかけては、何処に行つてもその噂うはさが繰返された。「そんなことがあるものか。」と言つて否定した人達も、後にはそれを信じない訳に行かなかつた。

ある時には、その不思議を知りたいと言ふので、その町の唯一の大学生——心理学研究の大学生が、正月の休暇に帰省してゐるのを好い機会しほに、ある人達と共に慈海のある寺へと出かけて行つた。

荒廃した寺のさまが先づかれを驚かした。山門は半ば倒れかけてゐた。本堂は本堂で、庇ひさしは落ち、屋根は崩れ、草が一杯にそこらに生えてゐた。

つゞいて大学生を驚かしたのは、畳の真黒になつた中に、ひとりぽつねんとして坐つてゐる僧の姿であつた。しかもそれは普通の僧侶のやうに頭も剃そつて居なければ、僧衣も着

てゐなかつた。普通のやうにして慈海は話した。

大学生は一時間ほど其処にゐた。

別に話といふほどの話はなかつたが、その態度の片鱗へんりんにも、容易に知ることの出来ない心理が深くかくされてあるのをかれは感ぜずには居られなかつた。その僧は新しい科学の話をも深い洞察どうさつと自信とを以てかれに話した。

大学生は歸つて来てから言つた。「さうですな。すっかり感心させられて了ひました。とても、私達にはあの境さかひはまだわからない。普通の催眠術などと言ふものよりはもつとぐつと奥ですな。」

「矢張やつぱり、不思議ですな。」

かう人々は言つて眼を睜みはつた。

十四

世間の罪惡が此頃では愈々いよく深くかれの体に纏まつはり着いて来た。

しかもそれは皆な自己を透とほして、立派な証券を持つてかれに迫つて来た。かれは愈々仏

の前に手を合せなければならぬことを感じた。

かれは求めざる処に集り、離るゝところに即^つき、捨てたところに拾ひ得る心理を深く考へた。

かれは朝早く起きて本尊の前に行つて読経した。

明けの明星の空に寒くかゞやく頃には、かれはいつももう起きてゐた。喜捨された暖かい衣はそこらに沢^{たくさん}山にあつたけれど、かれは矢張一枚の衣しか着なかつた。櫃^{ひつ}にも米が満ちてゐたけれども、かれは一鉢の飯しか食はなかつた。

寒い朝が続いた。霜^{しも}は本堂の破れた瓦を白くした。時には雪が七寸も八寸も積る時もあった。食がなくなつて軒に集つて来る雀にかれは米を撒^まいてやつた。喜捨の米を、淨^{きよ}い心のあらはれである淨^{きよ}い米を……。人に食を乞ふ身は、生^{いきもの}物に食を与へる身であることをかれは考へた。

感^{かん}極^{きはま}つたやうにしてかれは黙つて合掌した。

雀は、ちゝと鳴きながら、軒から其処に下りて来て、かれの顔を見るやうにして、又は食を与へて呉れるかれの恩を感じずるやうにして、首をかしげながら、小^{くちばし}さな嘴で、雪の中に半ば埋れたやうになつてゐる米粒をついばんだ。中には、縁側まで入つて来るものなど

もあつた。

今までに味ふことの出来なかつたやうな歓喜がかれの胸に漲り渡つた。

十五

垣に梅が咲き、田の畔に緑の草が萌える頃には、托鉢に出るかれの背後にいつも大勢の信者が集つてついて来た。

驚くべき光景が常にかれの周囲にあつた。鍛冶屋の亭主、青縞屋の主人、苦しみを持つた女、恋にもだえた女、若いのも老いたのも皆なぞろ／＼とかれの後について、合掌しながら歩いた。

始めの中は、町の警察の人達は、愚民を惑はすといふかどで、頻りにそれを取締つたが、しかもこの不思議な信仰の「あらはれ」を何うすることも出来なかつた。ところどころで、巡査は剣を鳴してやつて来て、その群に解散を命じた。一時は群集はあちこちに散つて行つても、瞬く間にまたあとからぞろ／＼と続いた。店で仕事をしてゐた女が跣足で飛び出して来てその群の中に雑つた。

ある時は、寺の世話人達が町の警察署に呼ばれて行つた。

世話人は種々いろくなことを訊きかれた。しかしその不思議な僧の行為の中には、あやしいやうなことは少しもなかつた。すべて自然であつた。愚民を惑はすための行為らしい行為は何処にも発見することが出来なかつた。

世話人の一人は言つた。

「何うも、私達も困つてをりますのです。実は、寺の再興のために呼んで来たのですが、私達の申すことや、普通の僧侶のしなければならぬことや、寺のことは何にもせず、一朝からお経ばかりを読んでゐるのですから……。米を持つて行かなければ行かないで、二日も三日も食はずにゐるやうな坊さんですから……。いゝえ、別に不思議なことをすると言ふではありません。唯、お経を読んでゐるばかりです。別に説教めいたことは致しません。あゝして托鉢たくはつして歩いてゐるばかりです。」

署長も後には首を傾けずには居られなかつた。

かれのあとについて行く群集は、次第にその数を増した。或は町の角、或は停車場の方へ行く路、或は小学校の裏の畑、或は小川に沿つた道、さういふところを大勢の信者達はかれと同じやうにして合掌読経してついて行つた。ある駅からある駅へと通じてる長い街

道には、うらゝかな春の日が照つて、かげろふが静かにその群集の上に靡いた。

時には今出たばかりの月が、黒いはつきりした林を背景にして、圈わを成して集つてゐる群集と僧とを照した。

十六

この不思議な僧の托鉢の話は、五六里隔つた町に嫁かして行つてゐる寺の先々代の娘の許もとまできこえた。

娘はもう三十六七の上かみさんであつた。そこは穀物を商あきなふやうな店で、街道に面した家の前には、馬に糧かてをやるために、運送の荷車などがよく来てはとまつた。上さんはふすまを馬方の出した大きな桶をけに入れてやつたりした。

上さんとその亭主の間には子供がなかつた。

亭主は四十五六位の正直な男で、せつせと箕みで大豆や小豆あづきに雑あつてゐる塵埃じんみを振ふるつてゐるの人々はよく見かけた。

その村の不思議な僧の話馬方や町の人達が上さんに話した。

始めはそれが自分の成長した寺での出来事とは知らず、また先代の放埒はうらつのために廃寺同様になつてゐる寺にさういふことがあらうとは思はないので、好い加減に聞いてゐたが、その話が度々たび耳に入るの、ある時、

「何ツて言ふんだね、その寺は？」

「何ツて言つたけな……」馬方は考へて、「さうく長昌院ツて言つたつけ。」

「長昌院？」

上かみさんは眼を睜みはつた。

そればかりではなかつた。段々聞くと、その不思議なことをする僧は、かの女の知つてゐる慈海らしいので、いよく驚愕きやうがくの念を深くした。

「その和尚をしやう、慈海ツて言ひやしねいかえ？」

「何ツて言ふか名は知らねえが、何でも先代の弟子でしだツて言ふこつた。」

「それぢや、慈海さんに違ひない。何時いつから来たんだ？」

「何でも去年あたりだんべ。丸つきりお経べい読んでゐるツていこつた。」

「へえ？」

上さんの心は動かずには居られなかつた。東京に行つてからの慈海の噂うはさも始めは少しき

いてゐたので、さうした和尚になるとはちよつと想像が出来なかつたが、段々聞^き糺^{たゞ}して見ると、てつきりそれは慈海であるに相違ないことが段々わかつた。

上さんは不思議にもちつとしては居られなかつた。ある深い渴^{かつ}仰^{かう}に似た念^{あふ}が溢^{あふ}れるやうに漲^{みなぎ}つて来た。それは昔の慈海に逢ひたいといふ心持ではなかつた。単になつかしいといふやうな心持でもなかつた。長年抱いてゐた重荷を下ろして救つて貰はなければならないうやうな気がした。

店が忙しいために、その願^とひも遂^とげられずに幾日か経つたが、其間にも片時もそれを忘れることは出来なかつた。上さんは願^{ぐわん}をかけて仏にお礼参りを怠^{おこ}つてゐるやうなすまなさを感じた。

ある晴れた日に、かの女はガタ馬車で出かけた。指折り数へて見ると、もう十二三年、それ以上もその故郷に行つて見たことはなかつた。町が近づくにつれてその心は躍^{をど}つた。やがて昔^{むかしなじみ}馴染^{なじみ}の町や人家や半鐘台や小学校があらはれた。やがて馬車の継^{つぎ}立^{たて}場^ばに来て下ろされたかの女は、一番先に、その近くにある懇意なある家に寄つて寺のことを訊^きいた。噂に聞いたところではなかつた。それは非常な評判であつた。「生^{いき}仏^{ぼとけ}——」かう言つてその人も話した。

上さんの胸は愈々躍つた。何より先に、車をさがした。そしてそこから一里位しかない村へと志した。

上さんは不思議な念に燃えた。数珠を持つてゐたならば、それを繰つて、幼い時に覚えたとお経の一節を誦したいと思ふほどであつた。そしてその渴仰の念に雑つて、昔の幼かつた時分のこと、美しく彩られた絵になつて見えた。次第になつかしい村は近づいて来た。林、それにつづいた森、その間からは寺の屋根が見える筈であつた。果して少し行くと見え出して来た。その壊れた屋根が、山門が、境内が、例の酒を禁じた石と鼻の欠けた地藏尊とが……。上さんは胸がある聖い尊い物に押しつけられるやうな気がした。

「そこで好う御座んす。」

で、車を下りて、上さんは静かに山門の中へと入つて行つた。銀杏返に結つた髪、黒の紋附の縮緬の羽織、新しい吾妻下駄、年は取つてもまだ何処かに昔の美しさと艶やささが残つてゐて、それがあたりの荒廃した物象の中にはつきりと際立つて見えた。

破れてはゐるが昔のまゝの寺である。昔のまゝの長い敷石である。井戸も深い草の中に埋れてはあるけれども昔のまゝである。かの女はさま／＼の思ひに満されながら庫裡の方へ行つた。

其時分には慈海はもう一人ではなかつた。群集の中の信者は、代り代りにやつて来てゐた。出来るならば、師の洗ひすゝぎをさせて頂きたい、朝夕の食事の世話をしたい、水を汲んで上げたい、高恩に報ゆるための労働に服したい。かう言つて、信者の男女なんによはやつて来た。現に、かの女の行つた時にも、若い老いた女や男が五六人庫裡に集つて経を誦ずしてゐるのを見た。

かの女は有難ありがたいやうな尊いやうな悲しいやうな涙の溢あふれて漲みなぎつて来るのを感じた。上さんは暫しばし立尽した。

信者達の熱心な誦經ずきやうの声はあたりに満ちた。取附く島もないやうにして上さんは立つてゐたが、やがて庫裡くりの奥から五分刈位に髪ひげの毛を延した鬚ひげの深い僧が此方にやつて来た。それはかれであつた。

かれはちよつと此方を見た。しかし別にこの不意の訪問に驚くといふやうな風もなしに、黙つてぢつと其処に近寄つて来た。さながらかの女の来るのを今日は待つてゐたと言はぬばかりに――。

少くとも上さんには無量な感慨が集つて来た。何を言つて好いか、何から話して好いかわからないほど胸が一杯になつた。しかし昔馴染むかしなじみ馴染と言ふやうな、又は昔の恋人と言ふや

うな単純な気分ではなかつた。凝^{ちつ}として見詰めて立つた彼の前に、かの女の頭はおのづから下つた。

長い間抱いてゐた苦痛、重荷、罪惡——さういふものをすつかりそこに投出して、かの女は思はず合掌した。

かれは手を合せながら唯一言かの女に言つた。

「今日からは、仏の道に、まことの道に……」

「難^{ありがた}有う御座います。」

かうかの女は微かに言つた。

上さんはかれの足を洗ふ資格すら自分にないやうな気がした。路々いろ／＼に考へて来たことも、つひに一言も言ひ得なかつた。

暫くして、本堂の前に行つて端坐したかれは、長い長い間、誦^{ずきやう}經の声をやめなかつた。それは皆なかの女の為に、罪の多いかの女のために……。

其処に集つた信者達は、それにつれて皆な熱心に声を張上げて誦經した。崇^{そうごん}嚴な気分があたりに満ちわたつた。

上さんは遂に信者達と其処に二日滞留して合掌誦經した。かの女も亦^{また}他の人達と共に熱

心な信者の一人となつた。

その話——この一条の話は、上さんの口からやがて人々に伝へられた。「ちやんと、私のやつて来るのを知つていらした。もう来さうなもの、来さうなものと思つて待つていらした。私の罪の為に誦經して下すつた恩は、恋人の情よりも、親の恩よりも深い。」かう言つて上さんは話した。

それを聞いた多くの女達は、皆な随喜の涙を流した。

十七

その平野の中でも、富豪として、品位ある旧家として知られてゐるS村のK氏の邸は、綺麗に刈込んだ櫨かしの垣を前に、後に深い杉の森を繞めぐらし、数多い白堊しろかべの土蔵の夕日に照されてゐるのが常に遠く街道から指ゆびさされた。

主人夫妻は土地でも評判がよく、慈悲に富んで、多い小作人に対しても常に寛大な処置を取るのを以てきこえてゐた。村の内にはその家からわかれた分家、別家なども多く、その中にも既に巨万の富を重ねてゐるものなども尠すくなくなかつた。

ところが、ある朝、驚くべき報知が村の人達を驚かした。

それは娘の家出であつた。

娘は今年二十一歳、昨年まで東京の学校に出てゐて、暑中休暇、正月の休みなどにはよく洋傘パラソルを日にかゝやかして、停車場からの長い道を帰つて来たが、町の人達、村の人達にも、「それ、Kさんのお嬢さんが通る。美しくならしたなア。」などと言はれてゐたが、今年は正月からずつと此方にゐて、東京に上つて行くやうな様子もなかつた。「もうそろ／＼良縁があるんだらう。」寄ると触さはるとかう言つてあたりの人々は噂うはさしてゐた。それが突然姿を躲かくした。

昨日ちよつと用事があると言つて、余所行よそゆきのちよい／＼着に、銘仙の羽織、縞しまのコオトといふ扮装いでたちで、何気なくひとりで出懸けた。その姿を村の人は其処もと此処で見かけた。ところがそれが夜になつても帰つて来なかつた。始めは町の友達の許もとにでも行つて、話が面白くなつて、つい帰るのを忘れたのだらうなどと思つて、思ひ当るところに彼方あちこち此方と迎へむなしの使者を出したが、その人達はやがて皆な手を空むなしうして帰つて来た。夜は更ふけて行つた。朝になつた。

それでも娘の姿は何処にも発見されなかつた。

父母、親類の心痛は一方でなく、村の人達は、一大事件としてやがて騒ぎ立つた。しか
し成^{なる}たけ、表沙汰にしたくない、不都合でもあつた時に困る。かう言つて、分家や別家の
人達は町の警察に行つても頼めば、役場に行つても頼んだ。それを聞いた人々は皆な驚^{おどろ}
愕^きの目を睜^{みは}つた。

これが不断さうした操行のわるい評判でもある娘なら、別にそれほど世間の耳を驚かし
もしないが、K氏の娘に限つては、これまでつひぞさうした噂は一度でもなかつた。また
家出をするやうな事情が家庭にあるなどとも思はれなかつた。それに、娘は学問もすぐれ
て出来、外国語の本も読み、人一倍立^{たち}優^{まさ}つた成績と評判とを持つてゐた。父母の愛も深
かつた。

何うしても誰か悪者か何かに誘^い拐^{かい}されたに相違ない。警察でも最初の鑑定は主として
その方面に傾いた。しかし、その管内は平和で、此頃、さうしたわるい者が他から立廻つ
た跡もない。

「不思議なこともあるものだ。」かう署長も刑事も巡査も皆な首をひねつた。

一番先に調べにやつた停車場では、昨日から今日にかけて、娘が汽車に乗つて行つたや
うな痕跡^{こんせき}はないと言つて来た。

娘は或は村や町の人々の眼に触れるのを顧慮して、わざと別な停車場まで行つて、そこから乗つて上京しはしないかと思つて、念のため、前後二三の停車場をも調べて貰つた。しかし矢張さうした形跡は何処にもなかつた。

もしこれが誘拐^{いうかい}でなしに、自発的だとすれば、何処かの淵川^{ふちかは}にでも身を投げやしないか。世間でも何も知らないけれど、その奥に何かこんがらかつた事情があつたのではないか。捜しあぐんだ後には、警察でも、かう言つて、方針をかへて、あちこちと沼の畔^{ほとり}や河の岸を探らせた。

矢張わからなかつた。

父母の悲痛の状態は見るに忍びないほどであつた。さうした覚悟の家出なら、何とか書いたものか何かが残つてゐさうなものである。又生きてゐるものなら、途中から何等かの便^{たより}がありさうなものである。しかし金も持つて行つた形跡もなければ、予めさうした予定があつたらしい痕跡も残つてゐない。娘は奥の自分の居間に坐つてゐて、ふと思ひ立つて出かけたらしき、座蒲団も硯^{すゝり}も筆もそのまゝになつてゐた。外国の小説らしい本が半ば開けられて、そこにちやんと赤い総^{ふさ}のついた枝折^{しをり}が挟んであつた。

その日も暮れた。

ところが、更に驚くべき報知が町や村を騒がせた。それは娘が長昌院の信者の中に雑つてゐたといふことであつた。他でそんなに大騒ぎをしてゐるのを少しも知らないやうにして、且つは信仰的エクスタシイが不意に娘の魂を誘つたといふやうにして、かの女は汚い大勢の群の中に雑つて、一心に経を誦してゐたのである。人々は皆な驚愕の眼を睜つた。署長や巡査はすべてを捨てて、剣を鳴して寺へと行つた。それと知つて、父親や分家の人達も車を飛ばした。

しかし署長や父親や村の人達が想像したやうなものではなかつた。慈海と娘とは未だに言葉すらも交へなかつた。群集の中の信者は話した。「何うしてそんなことが、あの生仏さまにあるのですか。このお嬢様は昨日の夕方ひよつくりおいでなすつて、私達に雑つておつとめをなすつていらしつた。何処のお嬢様か知らぬが、めづらしい篤志の方もあつたものだと思つてゐた。そして昨夜はかうして私達と此処に一緒においでになつた——生仏さまは、少しもそんなことは御存じなかつた。」

一人ならず、其処にゐた人達は、皆なさう話した。

娘は娘で、何うしても、此処に暫くの間、かうして置いて呉れと言つて、決して父親に従つて家へ帰るとは言はなかつた。警察の人達も何うすることも出来なかつた。

で、止むを得ず、一同は引上げたが、その噂は更に広く深く人々の心を動かした。大きな誘拐者——かうした議論が一町村ばかりではなく、郡から県までへも問題にされて行つたが、それと共に、不思議な坊主の噂は益々近県に聞えた。ある田舎ゐなかの新聞は二号活字か何かで、半ば信じ半ば怪しむやうな記事を載のせた。

夏になり秋になつても、娘は竟つひに家に帰らなかつた。後には、その父母は娘の雑用ざふようの米やら衣類やらを其処に運んで行かなければならなかつた。母親もやがてはその信者の群の一人になつた。

十八

さうした不思議は猶なほこれに留とどまらなかつた。貧しき者は富み、乏しき者は得、病める者は癒いえ、弱き者は力を恢くわ復ふくした。

「求めざるものは得、欲するものは失ふ。」かうしたかれの悟さとり、かれの日夜の行ぎやうと共に益々生気を帯びて来た。

半ば山に凭より半ば平野に臨んださびしい村は、今や驚くべき賑かな光景を呈した。人々

は山を越し野を越し丘を越して此処に集つて来た。

大きな誘拐者、大きな山師、かうした批評は、世間の一面にはまだ依然として残つてゐるけれども、信者はそんなことには最早頓着してゐなかつた。荒れ果てた本堂に籠るものは、日に日にその数を増して行つた。

かれ等は皆なその衣食を持つてやつて来た。破れた山門の前には、米や味噌を乗せた車が多く集り、あらゆるものが庫裡に満ち溢れた。

始めはその態度に呆れ、中頃はその始末に困つた村の世話人達も、今ではこの盛な光景に驚き且つ怖れた。遂には自ら熱心なる信者にならない訳に行かなかつた。

朝の読経の声は一村に響きわたつてきこえた。

しかし、慈海かれ自身は、決して以前の生活を改めなかつた。かれは寂然として唯ひとりその室にゐた。小さな机、古い硯箱、二三冊の経文、それより他はかれの周囲に何物もなかつた。かれは飢を感じるのを時として、出て来ては七輪を煽いだ。

しかも、かれの命を聞くをも待たずして、やがて本堂の破れた屋根は繕はれ、庇は新しくせられ、倒れかけた山門はもとの状態に修繕された。

女達は毎朝綺麗に廊下から本堂を掃除した。爺達は箒を持つて一塵も残らないやう

に境内を掃き^{きよ}めた。若い女達はさま／＼の色彩を持つた草花を何処からか持つて来て栽^うゑた。

昔のさびしい荒れた中に寂^{じやく}然^{ねん}として端坐してゐた如来^{にょらい}仏^{ぶつ}の面影^{おもかげ}は段々見ることが出来なくなつた。大きな須弥^{しゆみだん}壇^{だん}、金^{きん}鍍^{めつき}をした天蓋^{てんがい}、寶頭^{びんづる}盧尊者^{ろんじや}の木像、其処此処に置かれてある木魚、それを信者達は代る代るやつてきて叩^{たた}いた。

本堂も隙間がない位に一杯に信者が集つて、異口^{いく}同音に誦^{ずき}經^{やう}した。その中に雜つて、慈海の誦經の声は一段高く崇巖に高い天井に響いて聞えた。

(大正六年七月)

青空文庫情報

底本：「現代文学大系10 田山花袋集」筑摩書房

1966（昭和41）年1月10日発行

※疑問箇所の確認にあたっては、「定本花袋全集 第九巻」臨川書店、1993（平成5）年12月10日復刻版発行（元本は、内外書籍、1923（昭和12）年10月15日初版発行）を参照しました。

入力：林 幸雄

校正：松永正敏

2004年10月4日公開

2013年6月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ある僧の奇蹟

田山花袋

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>